



日誌より

心の日記の一頁

文華高女
附屬幼稚園

留岡よし子

三月〇日

「あゝ なつかしい幼稚園」

この四月から小學校へ行く子供のお別の歌の最後の一節である。

「先生、なつかしい、つて何のこゝこ?」

「そうねえ、なつかしいといふのはね、すきつていふこゝこ」

「ふうん、でも僕、もう幼稚園はすきぢやないんだよ、學校へ早く行き度いんだもの」

「すきぢやない」の一言にハツミする。

「學校へ」ミ聞いて新しい帽子洋服ランドセルの學生姿を思ひやり、瞬間に立直つた心構えでさりげなく、希望に燃えてゐる可愛いIさんの圓らな瞳をしみぐみ見つめる。

「そうね、Iさん、早く學校へ行きたいでせうね。洋服も帽子もランドセルも皆、この間お父様に松坂屋で買つて頂いたのですものねえ」ミ意識しての笑顔を向ければ、

「その通り」こいはん許りにIさんもニッコリ。



「でもIさん、また幼稚園へ遊びに来るでせう」 すきでない、にひきづられて、こんな事を聞いて見すにゐられない。

「うん、見せに来るよ」

するに「私も遊びに来るのよ」Mさんの甘え聲。つゞいて「私もよ、ねえM子さん、一緒に来るのねえ」、M子さんののぞきこむ。

二人は家も近所。小學校も同じ。たしかこの前の日曜日に、お揃ひのセーラーが買へた筈。見て欲しい學生姿を思ひ描いてであらう笑顔と笑顔。

突然、T雄さんの子供に似合はぬバスがひびく。

「先生、さういふのがなつかしい、ついでいふのでせう」

「オヤT雄さんらしいことを……」思ふ間もあらせず、T雄さんは調子を變へて

「何だい、Iさんてば、幼稚園がすきでなきや明日から来ない方がいゝよ」

しまつた！ あの瞬間の狼狽を見て取られたのか、T雄さんにはかなはない。

「僕は幼稚園好きだ」「私だつて大好きよ」「僕も」「私も」

そうして非難めいたまなざしがIさんに注がれる。

思ひがけない(全くIさんにきつては思ひがけない)結果となつて、可哀想に、無邪氣な顔に當惑の色が浮ぶ。

これはいけない、些かあわて氣味にならうとする自分を感じる。



Iさんの方は笑顔で慰めて置いて時局收拾。

「さうくつかしいつていふのはさういふことね、でもI雄さんもM子さんもA子さんも、みんな誰だつてIさんの様に早く學校へ行き度いでせう。みなさんもうこんなに大きくなつて、何でも一人で出来る様になつたのですもの、今度は學校へ行つて澤山面白いことを教へて頂くのでせう」

先生がIさんならやつぱり早く行きたいと思ふけれど、さういふ様子を見れば流石に、I雄さんも子供だ。

「いゝえ何時までも幼稚園に居りたうございます」なきゝいふ顔付はしない。

Iさんも、ニコくしだした皆を見廻して漸く安心したらしい。

可愛いゝ。離しきもない。けれど學校へ行きたくないさいはれては心配だ。

附添の顔が一寸見えないさいつては泣いた子供、そしてやがて、幼稚園へやりませんよ、さいはれゝばすぐに何でもいふ事をきく様になつたさういふ子供、それが幼稚園に満足しなくなる程成長して十分張切つた心ミ體で勇ましい門出をしやうとする時、もうこの子供さして與へるものを持たず、また求められもせず、忘れられ捨て去られる。

それでこそ憾はない。さはいふもののこの淋しさ。母を忘れる程、喜び勇んで嫁ぎゆく幸福な娘を見送る母の想ひも感はかくあらんかなさゝ、年毎に繰返す淋しい満足。(一〇、三、八)